

## 蒼空賦

粕屋郡篠栗町 吉田 洋

私が太平洋戦争に係わったのは、昭和17年12月1日（15歳）から同20年9月1日までの、2年9ヶ月である。

昭和16年、小学校在学中、母が危険だからと止めるのも聞き入れず、海軍飛行予科練習生を志願、翌17年12月1日三重海軍航空隊に入隊した。

氏神様の前での見送りに、一人前のませたあいさつをし、町長さんから「こんな幼い子が兵隊に行くのか」と、頭をなでられた事を憶えている。

入隊式までの5日間はお客様扱いで、教員も手取り足取りで優しく接してくれた。

予科連が「7ツ釦」であることも知らず（昭和17・11・1・軍装改正で7ツ釦となる）、当然「ジョンベラ」（水兵服）と思っていたので、「7ツ釦」の制服を着た時は嬉しかった。

12月5日入隊式、「海軍二等飛行兵」となるも、階級章なし（海軍ではこれを「カラス」といった）

「君子豹変す」とは誠にこの事、入隊式が終るや、教員の態度は一変した。同じ事は二度と教えない、まごまごしていると二口目には「アゴ、ピンタ」、連帯責任として「総員罰直」で、かの有名な「海軍バッター」。野球のバットよりやや太い檜の棒で、万歳をさせ、やや尻を突出したところをたたく。3発、5発、人間は強いと思った。牛や馬なら遠の昔に走り出しているだろうに、微動だにしない。少しでも動けばまた、プレミアがついて、3発、5発とよけいに食らう。

そんな毎日での新兵教育。「陸々、短々」、これは最初の1ヶ月の日課表である。午前「陸戦、陸戦」、午後「短艇、短艇」。鈴鹿おろしの砂煙の練兵場で、目も開けられず、38銃を担いで「オイチニ、オイチニ」。飛行兵が何んで鉄砲担いで陸さんの真似をせねばならんのか、と不平だらだら。午後は伊勢湾に出てカッター（短艇）漕ぎ、大人用のカッターは15歳の少年には大きすぎて、踏台に足が届かず、尾てい骨が腰掛けに当って猿の尻のように赤く皮がむけた。

試練はまだあった。夜になると「釣床教練」が待ち構えていた。ケンパスで作った「ハンモック」、ケンパスも7mのマニラロープのくくり縄も新品でがちがち、これを吊ったり畳んだり、爪が割れ、指から血が出て釣床に点々とにじんだ。

その他、洗濯、靴、服の手入れ。海軍は、一年中白の「事業服」を来て過ごすので洗濯が大変だった。これらは、全て定められた日課の合間をみてこなさなければならなかった。

就寝後、釣床の中から窓越しに見える月を眺めて、故郷でも父母たちがこの同じ月を見ていることだろうか、こんなひどい所にどうして志願までして来たのだろう、と故郷恋しさのあまり一人密かに涙したものだ。

1年、2年と時が経ち、階級が上がってくるとだんだん要領を憶え、上級生としてのプライドも出て、目の色、体格、態度も変わってきた。

卒業までの2年2ヶ月、普通学、軍事学、武技、体技が続く。中でも軍事学の実技では飛行兵に最も必要な電信（モールス信号）があった。卒業試験では1分間に、受信120字（1秒間に平均2字）、送信100字ができなければならない。体を鍛えるための予科練体操では、サーカスのような空中回転、12人を飛び越す空中水平飛び、1万mの競争等等、忘れられないことばかりである。

そんな時、一期先輩たちが繰り上げ卒業で巣立って行った。

いよいよ今度は俺たちの番だと思えるようになった頃、昭和19年8月のある日、突然私たち最上級生と次期生に「総員集合」がかかった。千畳敷の剣道場に集合してみると、下士官の教員は一人もおらず、士官ばかりで海軍省の幕僚もいて、ただならぬ雰囲気である。

司令が壇上に立ち、おもむろに口を開いた。

「戦局が重大な局面に来ている。この度これを打開するための新兵器が開発された。この兵器の搭乗員を諸子の中から募る、これは一発必中、生還を期せざる特攻兵器である。もちろん本日の事は軍極秘、他言無用である」

次に教育部長が立ち、「この特殊兵器の搭乗を熱望する者は◎、希望する者は○、このまま隊に残って空へ行きたい者は何も書かず、提出するように」、小さな紙片が配られた。

飛行機乗り憧れ、1年8ヶ月の猛訓練に耐えて来たのに、何で今さら飛行機を捨てると、いろいろ考えたが、結論はなかなか出ない。しかし、今この場で決断せねばならない。誰にも相談することは許されず、自分一人の考えで決断しなければならない。海か空か、戦局は飛行機に乗れない状況下であれば、予科練志願時既に国に捧げた命、たとえ生還を期せぬ兵器であっても、これに志願して国のために尽くすのが、今の自分に課せられた務めだと意を決して大きく◎を書いて提出した。

第1次、第2次の選抜には洩れた。長男、一人息子は除くなどという噂があったが、一人息子の私も第3次の選抜に入っていた。

昭和20年2月、「総員帽振れ」の見送りに送られて、三重海軍航空隊を後にした。

列車は東海道線を南下、大村線小串郷と言う小さな駅に着いた。途中下関駅で時間待ちのため停車、ホームから朝の門司の山々を眺めた時は、再び九州に帰ることは無いと思っていただけに、懐かしの感一入（ひとしお）だった。

「川棚臨時魚雷艇訓練所」の門表をくぐり、隊内の木造兵舎に落ちついた。早速「謎の新兵器」を見た。兵器と称し、全長5m余り、ベニヤ板製。時速23ノット、舳に250kgの爆装をし、一人乗りで敵艦に体当たりしようというもの。これを見た時、我等一同はもうガッカリだった。こんなもので洋上を敵艦までたどりつけるのか。早速訓練が始まった。

その頃（S20・2・25）第1次選抜の同期は、フィリピンのコレヒドールで敵艦に突入、全員特攻戦死していた。

やがて2ヶ月余りの訓練を終えて、同期50名は、高知県土佐市宇佐の土佐湾のど真ん中に基地を作った。燃料も少なく訓練はあまりできなかった。小学校でオルガンを弾いて歌ったり、校庭でテニスなどして出撃の日を待った。

8月15日正午、重大放送を聞いたが、よく聞き取ることができず、後で終戦とわかった。

そして翌早朝、突如出撃用意が発令され、急いで準備した。敵機動部隊が室戸の南東に接近中との情報。その時、室戸岬沖に物凄い火炎が数発上がった。すわ隣の部隊は出撃したぞ、我が隊には何故、出撃命令が出らんのか。遂に、出撃命令は出らずに夜明けを迎えた。情報によれば、隣の部隊は、同じく出撃準備中ガソリンに引火、爆薬が誘爆し、搭乗員のほとんどが爆死した由。

終戦の詔勅を聞いておきながら、誤った情報のもとで、あたら若い命を散らすなんて、さぞ無念であったろう。彼等の基地跡の慰霊碑に数回参らせてもらった。飛行服姿で、小手を太平洋の彼方にかざしたブロンズ像には「青春」と刻んであった。

今、私の手元に「蒼空賦」と題した、470ページに及ぶ分厚い記念誌がある。

我ら「海軍飛行予科練習生第19期生の記録」を全国同期生が、入隊50周年を記念して平成4年から3年がかりで綴ったものである。

蒼空とは＝大空に憧れて参集した若者たち

賦とは＝「ありの儘(まま)」

の意である。